小説フレームアームズ・ガール
後日談「繰り返される戦争」

1．例え意味など無くとも

『我らが偉大なる最高指導者・呂建民皇太子殿下からの、大いなる求愛を反故にした愚帝シルフィアには、冷酷無比なる神罰が下されるであろう。』

チャイナ王国軍の国営放送でのニュース番組において、女性キャスタの力強いナレーターに鼓舞されながら、チャイナ王国軍がグランザム帝国城下町に進撃する映像が映し出されていた。
そして迎撃するグランザム帝国軍が、チャイナ王国軍による砲撃で壊滅させられるCGも。

『我らが偉大なる最高指導者・呂建民皇太子殿下が下される秀英無双の戦術に導かれ、我らが誇る精鋭最強のチャイナ王国軍が、脆弱なるグランザム帝国軍の連中を必ずや一網打尽にするであろう。』

逃げ惑い、泣け叫ぶグランザム帝国軍の兵士たちを、チャイナ王国軍の兵士たちが一網打尽にするCGを、チャイナ王国城下町の市民たちが固唾を飲んで見守っている。
そんな彼らを監視するチャイナ王国軍の兵士たち。恐らくはこの国営放送を国民全員が必ず視聴するように、建民からの命令が下されているのだろう。

『脆弱なるグランザム帝国軍は我らが誇る精鋭最強のチャイナ王国軍によって、何も抵抗出来ずに大量虐殺されるであろう。奴らが誇る自称精鋭部隊・フレームアームズ・ガール共も、我らが偉大なる最高指導者・呂建民皇太子殿下の御前の下で、惨たらしい死を遂げるであろう。』

フレズヴェルクを纏ったカリンが、ゼルフィカールを纏ったリアナたちが、銃で撃たれ、剣で斬られ、戦車に踏みつぶされ・・・挙句の果てに戦場で身ぐるみ剥がされて兵士たちに犯され自害するなど、次々と惨たらしく戦死するCGが映し出される。

『愚帝シルフィアを王と崇めるグランザム帝国の愚民たちよ。心せよ。此度の戦は愚帝シルフィアの愚かさが招いた物である。あの愚かな女のせいで脆弱なるグランザム帝国軍の者どもは、我らが精鋭最強たるチャイナ王国軍によって大量虐殺されるのだ。』

最後に映し出されるのは処刑台に拘束され、無様に命乞いをするシルフィアが、チャイナ王国軍の兵士たちに銃殺刑に処されるCGだった。

『だが安心せよ。我らが偉大なる最高指導者・呂建民皇太子殿下からの大いなる愛によって、貴様たち愚民共は我らがチャイナ王国の保護の元、希望に満ち溢れた新たなる人生を歩む事が出来るであろう。』

最後にファンファーレで締めくくられたこの国営放送は、チャイナ王国だけでなくネットの動画サイトでも全世界に放送されていた。
その国営放送を城の訓練施設の大型モニターで厳しい表情で見つめているのが、チャイナ王国軍のフレームアームズ・ガール部隊隊長、雷春麗（レイ・チュンリー）大尉だ。
年齢はシオンやアーキテクトと同じ20代だろうか。彼女から発せられるその雰囲気だけでも、数

多の激戦を潜り抜けて来た歴戦の猛者だという事が伺える。
　そんな彼女をじっ・・・と見つめる、ジャージ姿の10人もの少女たち。
　彼女たちにもまた市民たちと同じように、訓練を中止してでもこの国営放送を必ず観るように、建民からの命令が下されているのだ。

「・・・とまあ、見ての通りだ。皇太子殿下はどうあってもグランザム帝国に戦争を仕掛けるおつもりのようだ。こんな無意味な戦いが我が国に利益をもたらすとは、私には到底思えないのだがな。」
「あの、隊長・・・殿下に対してそのような暴言、もし殿下のお耳に入るような事があったら・・・。」

　春麗に対して不安そうな表情を見せているのは、半年前にチャイナ王国軍に入隊したばかりの新兵の少女・呉翠玲（ゴ・スイレイ）上等兵だ。
　そんな翠玲に春麗は、とても穏やかな笑顔を見せる。

「私を心配してくれているのか？何、今この場には我々しかいないから大丈夫だ。お前たちもくれぐれも殿下に告げ口だけはしないでくれよな。」
「いえ、もし万が一この場に盗聴器や監視カメラなどが仕掛けられていたら・・・。」
「その時は不当な人権侵害を犯されたとして、国際裁判で殿下を提訴するまでの事だ。」
「隊長・・・。」
「お前たちも仮に自分の部屋の風呂場に監視カメラが仕掛けられていたら、どう思う？それと同じ事だ。」

　チャイナ王国は建民の絶対的な統治の下、徹底的な恐怖政治による社会主義を貫いている。
　建民の命令は何があっても絶対、建民に対して不平不満を言う者がいたとしたら、間違いなく有無を言わさず拘束されて、強制収容所送りにされてしまうだろう。
　だからこそ翠玲は、いや、翠玲だけでなく今この場にいるフレームアームズ・ガール部隊の少女たち全員が、平気な顔で建民に対して文句を言う春麗の姿に不安そうな表情をしていたのだが。
　それだけ春麗が、彼女たちに慕われているという事なのだろう。

「だが殿下は我々にグランザム帝国軍と戦えと仰られた。ならばこそ我々はこの国を守る為、例え意味など無くとも、この国の民たちに戦う姿勢を見せつけなければならんのだ。」

　殿下を守る・・・仮にも軍人である春麗の口からその言葉が出ない事自体が、あまりにも歪（いびつ）だと言わざるを得ない。
　シオンならエミリア様を守る、カリンならシルフィアを守る、アルフレッドなら陛下をお守りすると、同じ状況に置かれたのなら何の迷いもなくはっきりと宣言するはずだ。
　だが春麗の口から『殿下を守る』という言葉が出ない・・・それが建民の人望の無さを表していると言えるだろう。

　シルフィアに一方的な、最早命令と言っても過言ではない求婚をした挙句に、それをシルフィアに拒絶された途端に、今度はグランザム帝国に戦争を仕掛けるなどと言い出したのだ。
　10年戦争が終わったばかりで、グランザム帝国軍が戦力の多くを失った今からこそ、こうして建民も強気でいられるのかもしれないが。
　シオンも終戦協定式の際にカリンに話していたが、そんな下らない理由で戦場に出されたのでは、現場の兵士としてはたまった物ではないというのが本音なのだろう。
　いや、建民はシルフィアの事を、たかが小娘だと完全に馬鹿にしているのだ。
　そんな建民を命懸けて守りたいと願う者が、果たしてこの国に何人いるのだろうか。

「殿下もシルフィア皇女も互いに譲らない今のこの状況だ。近い内に私たちに出撃命令が下されるのは避けられないだろう。ロールアウトしたばかりのジィダオの存在が、殿下を強気にさせてしまっているのかもしれないがな。」
「隊長・・・。」
「だがそれでも私はお前たちに言う。こんな下らぬ戦で死ぬ事は絶対に許さんぞ。必ず全員が生きてこの国に戻り、その手に幸せを掴むのだ。これは私が隊長としてお前たちに下す命令だ。いいな？」
「「「「「「「「「「リージェイ（了解）！！」」」」」」」」」」

決意を秘めた瞳で、春麗に敬礼をする少女たち。
春麗もまた、そんな彼女たちに敬礼で返した。

「翠玲。お前は確か今回の戦が初の実戦だったな。」
「はい。」
「こんな軍人としての誇りを汚すような、あまりにも愚か極まりない侵略行為をお前の初陣にしてしまい、私は本当に申し訳なく思っている。」
「いえ、私は我が国の女傑とまで呼ばれた隊長の下で働かせて頂けるだけでも、とても光栄に思っています。」
「そう言って貰えるだけでもありがたいがな・・・だがシオン・アルザードではないが、自分の命を粗末にするような真似だけは絶対に許さないからな？」
「リージェイ！！」
「よし、私からの話は以上だ。総員訓練に戻れ。私は殿下に呼ばれているので一旦席を外すが、絶対に怪我だけはするなよ？させるなよ？いいな？」
「「「「「「「「「「リージェイ！！」」」」」」」」」」

敬礼する少女たちに見送られながら、春麗は部屋を後にする。
軍人としての誇りを汚すような、あまりにも愚か極まりない侵略行為・・・こんな事が建民の耳に入ろうものなら厳罰は避けられないだろうが、それでも春麗は言わずにはいられなかったのだ。
今回のグランザム帝国との戦争に・・・いいや、一方的な侵略行為に、果たして何の意味があるというのか。
建民のシルフィアに対する一方的な求婚、そして威圧的かつ挑発的な態度に、ただでさえこの国は各国から強い非難が浴びせられているのだ。
仮にこの戦争に勝った所で、カリンやシルフィアを討ち取った所で、果たしてこの国に何の利益があるというのだろうか。

だがそれでも春麗は軍人だ。上層部からの命令とあれば戦場に出なければならない。
ならばこそせめて、必ず生きてこの国に戻る・・・そして翠玲たちを自らの手で守り抜く・・・春麗はその決意を顕わにしていた。
その決意を胸に秘め、春麗は部屋の扉をノックする。

「殿下。雷春麗大尉、ご命令により出頭致しました。」
「よく来たな雷大尉。入れ。」
「はっ、失礼致します。」

部屋を開けるとそこにいたのは、ソファにどっかりと腰を下ろす建民の姿。
威風堂々と、春麗の事を睨み付けている。
そんな彼の傍に下着を付けずに透明な服を着た、その美しい裸が顕わになった使用人の女性

たちが寄り添っている。
　その内の2人が建民の隣に座り、左右から建民に抱き着いている。
　相変わらずの歪な光景・・・春麗は思わず厳しい表情になってしまっていた。

「遠慮せずにそこに座るがいい。何か飲むか？」
「いえ、勤務時間中につき、控えさせて頂きます。」
「相変わらず生真面目な女よのう。まあそれがお前の良い所ではあるのだがな。」
「は・・・では失礼致します。」

　建民に敬礼し、ソファに座り姿勢を正す春麗。
　そんな彼女の凛とした姿を、使用人の女性たちが一斉に見つめている。

「まあそんな事はどうでもいい。話と言うのは他でもない、今回の戦における作戦の最終確認と・・・あと金（キム）リンダの様子はどうだ？」
「先日拘束した、あのカリン・ラザフォードの母親の事ですね？現状では丁重に扱っております。部下たちにも決して彼女を傷付けないよう念を押してありますが・・・。」
「それで良い。下手に傷付けてしまえば人質の意味が無いからな。」
「ですが殿下、敵国の兵士の母親を人質を取るなど・・・もし世間に知れてしまった場合、我が国は他国からどう思われるのか・・・。」
「あくまでも念には念を入れてだ。まあ今回の戦でカリン・ラザフォードを脅さなければならないような状況に陥るとは、私には到底思えないのだがなぁ。はっはっはっはっは。」

　確かに今回の戦いで建民が考案した奇襲作戦が上手くいけば、グランザム帝国軍を抵抗する暇も与えずに一網打尽に出来るかもしれないが・・・果たしてそう簡単に行くのだろうか。
　幾ら何でも建民は、楽観視し過ぎなのではないだろうか。
　そんな不安を見せる春麗とは対照的に、建民は『勝てる』という確証を得たと言わんばかりに、傍に寄り添う2人の使用人の女性たちを抱き締めながら高笑いする。

「では早速本題に入るぞ。今回の作戦の最終確認だ。お前たちジィダオ部隊の役目は、あのカリン・ラザフォード率いるゼルフィカール部隊の最悪足止め、可能であれば撃墜だ。」
「は、承知致しております。」
「お前たちが奴らを指定ポイントに追い込んだ後、『例の作戦』を実行する・・・上手くいくかどうかは全てお前たちジィダオ部隊の活躍にかかっているのだぞ？それを肝に銘じておけ。いいな？」
「リージェイ！！」
「まあ我が国の女傑とまで呼ばれたお前がジィダオを身に纏うのだ。その時点でまず間違いはないとは思うがな。まさかシルフィアもインペリアルが我が国のスパイに盗まれていたとは、夢にも思うまいて。はっはっはっはっは。」

　高笑いする建民を春麗が姿勢を正しながら、厳しい表情で見つめていたのだった・・・。

2. 真の自由と平和を勝ち取る為に

　それから3日後・・・シルフィアからの度重なる警告や抗議も空しく、遂にチャイナ王国軍がグランザム帝国城下町へと侵攻を開始した。
　指定ポイントに到達後、建民からの命令と同時にいつでも攻撃出来るよう、その場で待機する

チャイナ王国軍。
　迎撃する立場のグランザム帝国軍も城下町周辺に部隊を展開。チャイナ王国軍が侵攻を開始してもいつでも迎撃出来るよう、着々と準備を整えていた。

　もういつ開戦してしまってもおかしくない緊張の最中、城下町では今回の戦争に異を唱える非戦派の市民たちが、プラカードを手に一斉に城まで押しかけ、シルフィアに対して激しい抗議活動を行っていた。
　そんな彼らを帝国軍の兵士たちが、城の内部にまで侵入されないよう必死に押さえ込んでいる。

「シルフィア皇女殿下は直ちに呂建民皇太子殿下に降伏し、今回の政略結婚を受け入れるべきだ！！それだけで戦争は回避され、両軍共に無駄な犠牲を出さずに済むのだ！！」
「そうだそうだ！！それが皇女として成すべき政務なのだ！！国の頂点に立つべき皇女に、自由恋愛をする資格などあると思っているのか！？」
「今回の戦争で、私の息子が再び戦場に駆り出されてるのよ！！傷だらけになりながらも10年戦争を生き延びてくれたのに、もしこの戦争で死んでしまったらと思うと、私は・・・！！」
「シルフィア皇女殿下は10年戦争の悲劇を再び繰り返すつもりなのか！？そんな事は断じて許されない！！何としてでも戦争を回避する道を探るべきだ！！」

　一見するとあまりにも無茶苦茶な事を言っているようにも取れるが、シルフィアの皇女という立場から考えれば、彼らの抗議内容はある意味では決して間違っているとは言えないのだ。
　皇女という国の最高指導者という立場にあるシルフィアには、国を守る為、国民を守る為、最大限の努力をする義務がある。
　だからこそシルフィアには建民との政略結婚に応じるべきだと・・・それだけで戦争を回避し、無駄な犠牲を出さずに済むのだと、彼らはそう主張しているのだ。
　彼らの主張にはシルフィア本人の人権が全く尊重されていないのだが、そこにシルフィア本人の恋愛感情など挟む余地など無い。言わば建民に対する生贄も同然・・・だがそれが皇女として果たさなければならない義務なのだと、彼らは全く容赦してくれなかった。

　一斉にシルフィアに罵声を浴びせる彼らだが、その声は城の指令室にいるシルフィアには届いていない。
　この戦争をどうやって効率よく勝利に導くか・・・シルフィアは今、それだけで頭が一杯なのだ。
　シルフィアの目の前の巨大モニターには、両軍の現在位置や戦況を示す膨大なデータが映し出されている。
　そして城の外でシルフィアに対して、抗議活動を行っている市民たちの姿も。
　指令室の女性士官たちが一斉に部隊に指示を出す最中、シルフィアは意を決して突然立ち上がった。

「これより演説を行います。私の姿を全世界に流して下さい。」
「はっ！！」

　シルフィアの命令で、女性士官の1人が機器を操作。
　世界中の人々が今回の戦争に注目する中、シルフィアの姿が動画サイトの生放送コーナーに映し出された。
　あっという間に視聴者数が数百万を超える中・・・女性士官からのOKの合図と共にシルフィアが世界中に演説を始めたのだった。

「この母なる大地・惑星アルテミアに住まう世界中の皆さん。私はグランザム帝国皇女シルフィア・

グランザムです。既に皆さんもご存じの通り、残念ながら私からの建民殿に対する度重なる抗議も空しく、今回の開戦へと至ってしまいました。」

コーネリア共和国ではシオンたちが・・・ルクセリオ公国ではジークハルトたちが・・・待機中のカリンたちグランザム帝国軍の兵士たちも・・・そして世界中の人々の多くが、テレビやパソコン、携帯電話やスマートフォン等を通じて、一斉にシルフィアの演説に傾注する。

「そして今回の開戦に異を唱える我が国の城下町の市民の方が、今も私に対して激しい抗議活動を行っていらっしゃいます。私が建民殿との政略結婚に臨めば戦争は回避出来るのだと。今すぐに建民殿に降伏するべきだと。それが私の皇女として果たさなければならない政務なのだと。」

そうだそうだ！！と、プラカードを手にした非戦派の市民たちが、一斉にシルフィアに対して激しい罵声を浴びせ続ける。
その話題の真っ只中にいる張本人である建民もまた、旗艦からシルフィアの演説の様子をニヤニヤしながら見据えていたのだが。

「確かに彼らの仰る通り、私が建民殿との政略結婚に臨めば、今回の戦争は確実に回避出来るでしょう。そうすればこの戦争で両軍共に、確かに1人の犠牲も出さずに済むのかもしれません。それが皇女として私が果たさなければならない政務だという彼らの主張も、あながち間違ってはいないのでしょう。」

シルフィアの言葉にプラカードを手にした非戦派の市民たちが、まさにその通りだと一斉に盛り上がりを見せる、その最中。

「・・・ですが。」

そんな彼らを問答無用で黙らせるかの如く、シルフィアが突然強い口調で彼らの主張を否定したのだった。
突然のシルフィアの強い口調に、彼らも思わず一斉に黙り込んでしまう。

「今ここで私が建民殿との政略結婚に臨んでしまえば、我が国に決して明るい未来などありません。その果てに待ち受けるのは、建民殿による我が国への圧政です。仮に戦争を回避したとしても、それで我が国が果たして本当に平和だと言えるのでしょうか？」

シルフィアの演説に熱が帯びる。力強い言葉で、人々に強く訴えかけるように、シルフィアは自らの想いを紡いでいく。
建民による徹底した恐怖政治による、絶対的な社会主義・・・そんなチャイナ王国のような偽りの平和を、シルフィアは決してグランザム帝国の人々に味合わせる訳にはいかないのだ。

「先日のチャイナ王国からの国営放送で、あのニュースキャスターの方はこう仰いました。仮にこの戦争で我々帝国軍が敗北したとしても、残された国民の皆さんには希望に満ち溢れた未来が待っていると。ですがそんな事は断じて有り得ないと私は断言します。」

シルフィアの力強い演説の前に、プラカードを手にした非戦派の市民たちの抗議も次第に少なくなっていく。
このシルフィアの演説を前にしても、未だにシルフィアに抗議を続ける者たちも少なからずいるのだが、それでもシルフィアは決して引かなかった。

「考えてもみて下さい。一方的に私に求婚を迫り、それを私が断った途端に、それが気に入らないからという下らない理由で戦争を仕掛ける・・・そのような愚劣な男が統治する国に、果たして本当に真の平和など有り得るのでしょうか。」

今現在グランザム帝国城下町に侵攻する為に部隊を展開している、春麗や翠玲たちチャイナ王国軍の者たちも、複雑な表情でシルフィアの演説に耳を傾けていた。

「現にチャイナ王国の人々は、建民殿の圧政によって今もなお苦しめられています。社会主義という大義の下に徹底した監視体勢が敷かれ、誰もが自由を奪われています。言わばディストピアの典型例だと言えるでしょう。私はグランザム帝国を、そのような息苦しい国にする訳にはいかないのです。」

建民に忠誠を誓えば一定の生活は保障されるが、少しでも逆らえば強制収容所に送られ、最悪の場合はその場で銃殺刑にされてしまう。
この徹底した恐怖政治による社会主義制度のお陰で、確かにチャイナ王国の犯罪発生率は他国よりも相当低い水準にあるのだが、それが果たして本当の意味で平和だと言えるのか。本当の意味で人々は豊かだと言えるのか。
シルフィアはグランザム帝国の人々に、そんな辛い目に遭わせる訳にはいかないのだ。
そしてシルフィアの力強い演説は、今度はカリンら帝国兵たちにも向けられたのだった。

「勇敢なる我が帝国軍の皆さん。皆さんが帝国軍に入って下さった動機は何ですか？国の為？家族の為？大切な人の為？自分の為？あるいは収入がいいから？それとも合法的に戦闘が楽しめるから？・・・理由は人それぞれでしょう。私はそれらを全て否定するつもりはありません。」

帝国兵たちの誰もが、シルフィアの言葉に注目する中・・・シルフィアの言葉に一層力が込められ・・・そして・・・。

「ですがどうか、どうか今この時だけは、私の剣となり、盾となって下さいませんか？この国の人々を守る為、そしてこの国の真の自由と平和を勝ち取る為に、どうか皆さん、私に力を！！」

うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！
シルフィアの演説によって帝国兵たちが鼓舞され、一斉に歓声が沸き起こる。
そして抗議活動を行っていた者たちのほとんどが、シルフィアに説得されてしまったかのように、すっかり黙り込んでしまったのだった。

『行ってくるわね、シルフィア。』
「・・・カリン・・・。」

演説を終えて溜め息をついたシルフィアに、新型フレームアーム・レイファルクスを身に纏ったカリンが、まるでシルフィアを励ますかのように穏やかな笑顔で通信を送って来た。
ヴァルファーレを参考にして作ったとカリンがシオンに語っただけあって、その姿はまさにヴァルファーレにそっくりだ。
カリンの意向によりファンネルの搭載は見送られたが、代わりに新型武装のアーセナルアームズが変形、合体して翼の形状となり、カリンの背中に取り付けられている。
その美しくも神々しい純白のレイファルクスを身に纏ったカリンは、まさにグランザム帝国を守護する純白の天使であるかのようだ。

そんなカリンをモニター越しに、複雑な表情で見据えるシルフィア。
出来ればカリンには危険な戦場の最前線に出向いて欲しくなんかない。この安全な指令室で自分の傍にいて欲しい。
だがシルフィアは皇女として、戦場でカリンだけを特別扱いする訳にはいかないのだ。
今回の作戦においてレイファルクスを纏ったカリンは、まさに戦略の最重要の『要』・・・カリンがどれだけ迅速に制空権を制圧出来るかに、作戦の成否がかかっているのだから。

「カリン、作戦通りお願いしますね。それと・・・死んだら殺しますよ？いいですね？」
『・・・了解！！』

意を決した表情で、カリンはシルフィアに敬礼をして通信を切る。
そんなカリンを見つめるリアナらゼルフィカール部隊の少女たちに、カリンは力強く呼びかけた。

「皆、聞いてくれる？これはいつもの模擬戦や軍事演習じゃない。紛れも無い実戦よ。これから出向く戦場では皆の命を賭けて貰う事になるわ。」

とても真剣な表情で、リアナたちはカリンの言葉に耳を傾ける。
カリンはそんな彼女たち1人1人の顔を見据えながら・・・力強く彼女たちに呼びかけたのだった。

「だけど、敢えて言うわよ・・・死んだら殺すわよ！？いいわね！？」
「「「「「「「「「イエス・マム！！」」」」」」」」」

そしてシルフィアの演説を聞き終えた建民もまた、ニヤニヤしながら兵たちに出撃命令を下したのだった。
やはり建民はシルフィアの事を、たかが小娘だと馬鹿にしてしまっているようだ。

「どこまでも愚かな娘だ。大人しく私に従ってさえいれば、我が第6夫人としての輝かしい未来が待っていた物を・・・全軍進撃開始！！奴ら帝国軍を一人残らず叩きのめすのだ！！」

チャイナ王国軍が進軍を開始する。その様子が城の指令室に・・・そして戦場カメラマンを通じて世界中に映し出されたのだった。

「チャイナ王国軍、進軍を開始しました！！」
「全軍、迎撃を開始して下さい。」
「了解！！全部隊、迎撃を開始して下さい！！アーバレスト、バリスタ、コキュートス、全砲門オールグリーン！！照準チャイナ王国軍に合わせ！！くれぐれも味方を巻き込まないよう注意して砲撃を・・・」

シルフィアの命令で城からの援護射撃が行われる最中、巡洋艦からカリンらフレームアームズ・ガールたちもリニアカタパルトで次々と出撃していく。

『進路クリア、ゼルフィカール部隊、発進どうぞ！！』
「リアナ臨時小隊、テイクオフ！！」
「「「「「「「「イエス、マム！！」」」」」」」」
『ゼルフィカール部隊出撃完了。続いてレイファルクスの発進シークエンスに移行します。』

リアナたちが巡洋艦から出撃してから、カリンもまたリニアカタパルトで出撃準備を整える。
そしてカリンの傍には、60機近い大量の小型無人戦闘機・キラービーグの姿も。
今回の作戦ではカリンはリアナたちとは別行動となり、独立遊撃手として大量のキラービーグを従え、単独で出撃するようだ。

『リニアカタパルト接続、レイファルクス全システムオールグリーン。発進シークエンスをカリン隊長に譲渡します。』

女性オペレーターの言葉と同時に、カリンの身体がリニアカタパルトで宙に浮く。
必ずこの国を、この国の人々を、そしてシルフィアを守る・・・カリンはその決意を顕わにしていた。

『進路クリア。レイファルクス、発進どうぞ！！』
「カリン・ラザフォード、レイファルクス、出るわよ！！」

その決意を胸に、カリンが再び戦場へと飛翔したのだった。

3. 繰り返される戦争

「行くわよ！！チャイナ王国軍！！」

両軍の地上部隊が放つビームが戦場で乱れ舞う中、レイファルクスを纏ったカリンが凄まじい速度で上空を飛翔し、制空権を掌握しようとするチャイナ王国軍の航空部隊を迎撃した。
翼の形状をした背中のアーセナルアームズからベリルソードを分離させ、それがまるでファンネルのように飛翔し、ぴったりとカリンの右手に収まる。
カリンに無数の戦闘機からのビームマシンガンが襲い掛かるが、レイファルクスのあまりの機動性の前にロックオンすらままならない。

「はあああああああああああああああああああああああっ！！」
「う、うわあああああああああああああああああああああっ！！」

カリンのベリルソードが、情け容赦なく戦闘機のコクピットを貫いた。
そのまま首を貫かれたパイロットは即死し、制御を失った機体が地上へと落下していく。
他の戦闘機が必死にカリンをビームマシンガンで撃とうとするものの、オートパイロットで自動制御されたキラービーグが死角から襲い掛かり、次々と戦闘機を撃墜していった。

「何だあの機体は！？純白のヴァルファーレだと！？」
「少佐！！我が軍の戦闘機がラザフォード中尉に次々と撃墜されています！！」
「怯むな！！全艦全砲門開け！！砲火を奴に集中させい！！」
「リージェイ！！」

何とか制空権を確保しようと、チャイナ王国軍の無数の巡洋艦からも次々とビームキャノンが放たれるが、それでもレイファルクスを纏ったカリンを捉える事は出来なかった。
放たれるビームキャノンを次々と避け、カリンは巡洋艦の群れに突撃。
背中のアーセナルアームズが次々と分離、フォトンランチャーへと合体。
それを手に取ったカリンが巡洋艦の砲台や推進部に次々と砲撃し、キラービーグの援護を受けながら、あっという間に巡洋艦を次々と無力化していく。

「2番艦、3番艦、損傷甚大！！推進部を破壊され制御不能！！」
「砲撃をランダム掃射せよ！！あの小娘に的を絞らせ・・・！？」
「少佐ぁっ！！ラザフォード中尉がもう目の前にぃっ！！」
「馬鹿な！？何と言う機動力なのだ！？う、うわあああああああああああああああああっ！！」

カリンが上空を蹂躙する中で、地上でもまたリアナらゼルフィカール部隊が躍動していた。
襲い掛かるビームマシンガンをビームシールドで防ぎ、チャイナ王国軍を次々と撃墜していく。
あっという間に戦場に、チャイナ王国軍の兵士たちの死体の山が出来上がったのだが。

「来たなゼルフィカール！！ジィダオ部隊を迎撃に向かわせろ！！自らの技術で滅びるがいいわ！！小娘共がぁっ！！」

建民からの命令で巡洋艦のリニアカタパルトから戦場の最前線へと突撃するのは、新型フレームアーム・ジィダオを身に纏った春麗、翠玲らフレームアームズ・ガールたち。
ジィダオ・・・建民がグランザム帝国の城下町に送り込んだスパイが軍事施設から盗み出した、かつてシグルドが使用していたインペリアルを下にチャイナ王国軍が作り出した、量産型のフレームアームだ。
インペリアルの量産機というだけあって、その形状はインペリアルにそっくりだ。

「貴官らに私怨は無いが、これも国の為、民の為・・・貴官らにはここで死んで貰うぞ！！総員突撃せよ！！」
「「「「「「「「「リージェイ！！」」」」」」」」」
「あのフレームアームの形状・・・インペリアルの量産型か・・・！！総員迎撃開始！！」
「「「「「「「「イエス・マム！！」」」」」」」」

春麗とリアナの号令と共に、両軍のフレームアームズ・ガールたちが戦場で死闘を繰り広げる。
だがゼルフィカールの圧倒的な火力をもってしても、強固な防御力を誇るジィダオを傷付けるには至らなかった。
放たれるビームマシンガンを、ジィダオ部隊の少女たちはガンシールドで次々と無力化していく。

「そんな豆鉄砲、このジィダオには通じないんだからぁっ！！」

翠玲がガンシールドから放ったビームが、情け容赦なくリアナに襲い掛かった。
それを何とか避け続けるリアナに、春麗がビームランスで斬りかかる。

「トラヴィス少尉！！お命頂戴する！！覚悟！！」
「ここで死ぬ訳には行かないわ！！死んだらカリンちゃんに殺されるんだからぁっ！！」
「何を訳の分からない事を言っているのだ貴官はぁっ！？」

春麗とリアナがビームランスとビームサーベルを何度もぶつけ合う。2人の周囲に糸状の閃光が走る。
その様子を上空からカリンが、厳しい表情で見据えていたのだが。

「チャイナ王国軍がフレームアームを！？しかもあの形状、まさか盗まれたインペリアルのデータを・・・！！」
『カリン。彼女たちはリアナたちに任せて、貴方は作戦通り制空権を掌握して下さい。』

「了解！！」

シルフィアからの命令で、カリンは再び上空の戦闘機や巡洋艦の群れへと突撃していく。
ベリルショットライフルにベリルソードを連結させ、イーグルハントへと合体させる。
銃剣へと変形、合体したアーセナルアームズが、襲い掛かる戦闘機を次々と切り裂き、撃ち抜き、撃墜していった。
近距離、中距離、遠距離と、あらゆる状況での戦闘に適した様々な形状、出力の武装へと変形、合体させる事が出来る・・・それがこのアーセナルアームズの最大の強みなのだ。
それがヴァルファーレと互角の性能を持つレイファルクスと、それを身に纏うカリンの圧倒的な戦闘能力と合わさり、凄まじいまでの戦果を叩き出していた。

だがカリンの奮闘も空しく、地上ではリアナらゼルフィカール部隊が、完全に春麗率いるジィダオ部隊の猛攻の前に押されてしまっていた。
放たれる攻撃をガンシールドで易々と防がれ、圧倒的なジィダオの防御力の前に傷一つ付けられない。
その両軍のフレームアームズ・ガールたちの凄まじい戦闘の最中、春麗のビームランスが遂にリアナのビームマグナムを真っ二つにした。
完全に押され気味のゼルフィカール部隊・・・それを見かねたのか、シルフィアの命令で城から放たれた閃光弾。

「後退命令を確認、一時撤退する！！」
「「「「「「「「イエス、マム！！」」」」」」」」

ジィダオ部隊に敗れ、リアナの命令で撤退していくゼルフィカール部隊の無様な醜態を目の当たりにした建民が、高笑いしながら両手をバンバンと何度も叩いたのだった。

「ふはははははははは！！見たかシルフィア！！これが我らが誇るジィダオの圧倒的な性能よ！！いかにゼルフィカールと言えども、ジィダオの強固な装甲の前では所詮は紙屑も同然だ！！総員そのまま突撃！！奴らを追い込みつつ指定地点で待機せよ！！」

カリンもそうなのだが、リアナらゼルフィカール部隊もまた、グランザム帝国軍にとっての絶対的な「エース」・・・その勝敗自体が戦局を大きく左右してしまう。
そのリアナたちの敗北がきっかけとなったのか、劣勢だったチャイナ王国軍が一気に湧き上がり、一斉にグランザム帝国軍を押し返し始める。
パワードスーツを纏った帝国兵たちでさえもチャイナ王国軍を抑え切れず、次々と自陣へと撤退していくグランザム帝国軍。
だが春麗だけはこの状況に、強い違和感を覚えたのだった。

「おかしい・・・彼女たちの実力は本当にこの程度なのか・・・？」

あの究極最強のフレームアーム・ヴァルファーレを纏った英雄シオンさえも苦しめたゼルフィカールの性能が・・・敗れたとはいえ精鋭を誇るスティレット・ダガー部隊の少女たちとも互角に渡り合った彼女たちの実力が・・・本当にこんな程度の代物なのか。
幾ら何でも、あまりにも手応えが無さすぎるのだ。
そう・・・まるでわざと春麗たちに敗北し、撤退したかのような・・・。

「殿下！！この戦、何か変です！！彼女たちの力はあんな物では無い筈！！それなのにこんな

にあっさりと引くはずが・・・！！」
『何を躊躇っておるか雷大尉！！それだけジィダオの性能が圧倒的だという事だろうが！！』
「しかし！！」
『いいからそのまま突撃しろ！！このまま例の作戦を実行する！！貴様らは指定ポイントで待機せよ！！これは命令だ！！』
「くっ・・・リージェイ・・・！！」

国の最高指導者たる皇太子からの命令とあれば、たかが大尉という身分でしかない春麗には従う以外の選択肢は残されていなかった。
ここで自分が建民に逆らってしまえば、仮にこの戦闘に勝利したとしても、彼女の部下たちやその家族までもが抗命罪や国家反逆罪に問われ、強制収容所送りに・・・最悪その場で銃殺刑にされてしまう事にもなりかねないのだ。
絶対的な社会主義国家であるチャイナ王国は・・・そういう国なのだから。

「仕方が無い。お前たち、聞いての通りだ！！このまま指定ポイントまで奴らを追い込むぞ！！」
「「「「「「「「「リージェイ！！」」」」」」」」」

確かに戦況はチャイナ王国軍が優勢だ。だが果たしてこのまま作戦通りグランザム帝国軍を追い詰めてしまっても本当にいいのか。
心の中で不安を抱えたまま、春麗は部下たちに突撃命令を下す。
その様子を満足そうな笑顔で見据える建民だったのだが、女性オペレーターからの航空部隊劣勢の報告を受けて、一転して不満そうな表情を見せたのだった。

「何？ラザフォード中尉の機体がフレズヴェルクではないだと？」
「はっ！！ライブラリーに該当データはありません！！帝国軍の新型と思われます！！」
「何だあの機体は？ヴァルファーレによく似ているな。」

上空を縦横無尽に駆け巡るカリンが次々と巡洋艦や戦闘機を撃墜していくのだが、それでも建民は余裕の態度を崩さない。

「だが、まあいい・・・奴らがどんな新兵器を用意しようが、我が戦術の前では全て無意味と化すのだ！！このまま例の作戦を実行する！！大型ミサイルを城下町に向けて発射せよ！！」
「リージェイ！！」

旗艦から放たれた大型ミサイルが、一直線にグランザム帝国の城下町へと突撃していく。

「チャイナ王国軍の旗艦から大型ミサイルが射出されました！！真っすぐにこちらへと向かっています！！」
「ヴンダーガストでミサイルを破壊して下さい。」
「了解！！ヴンダーガスト1番機、照準を大型ミサイルに合わせ！！」

シルフィアの命令で、指令室の女性オペレーターが大型砲台の照準を大型ミサイルに合わせる。
かつてスティレットの故郷と家族を全て奪った忌まわしい兵器・ヴンダーガスト・・・だが兵器というのは結局は、使う者次第で善にも悪にもなる物なのだ。
スティレットにとって忌まわしい存在であるヴンダーガストが今、その凄まじい威力を発揮する。
戦場で命懸けで戦う帝国軍の兵士たちを、そして城下町の人々を守る為に。
ヴンダーガストの砲身にエネルギーがチャージされ、放たれた大型ミサイルを正確にロックオン。

「ヴンダーガスト、発射！！」

女性オペレーターの合図と共に放たれた超威力のエネルギー波が、正確無比の狙いによって大型ミサイルを直撃。
直撃を受け、大破した大型ミサイルなのだが・・・これは建民が仕掛けた狡猾な罠なのだ。

「馬鹿め、まんまと我が術中にはまったな、シルフィア！！」

破壊した大型ミサイルから、大量の赤色の粒子が撒き散らされる。
その赤色の粒子は、人体には全くの無害なのだが・・・巻き込まれた帝国軍の兵士たちが所持するビーム兵器の威力が、粒子の影響を受けて大幅に威力が減退されてしまっていた。
粒子攪乱による、ビーム兵器の大幅弱体化・・・それが建民の狙いだったのだ。

「総員実弾装備に切り替えよ！！慌てふためく帝国軍の奴らを大量虐殺するのだぁっ！！」

建民の命令でチャイナ王国軍の兵士たちが一斉に実弾兵器に持ち替え、マシンガンやロケットランチャーといった実弾武器を次々と赤色の粒子に向けて乱射したのだった。

4. 壮絶な死闘の果てに

今から約20年前にルクセリオ公国の科学者が発見したビーム粒子の存在は、当時の技術レベルにおいては驚異的な代物であり、迫真の大発見だとして世界中から絶賛された。
この科学者はビーム粒子を用いた技術によって世界中の人々が豊かになってくれればと願い、世界中の国々にビーム粒子に関するデータと論文を提供。
だがこの科学者の平和を願う想いとは裏腹に、技術の提供を受けた世界中のほとんどの国が、ビーム粒子の技術を兵器として転用する事になる。

ビーム粒子を圧縮して放つビームマシンガンやビームハンドガンは、それまでの実弾銃よりも高威力であり、またビームサーベルの刀身は鋼鉄をも易々と切り裂き、ビームシールドの防御幕はロケットランチャーの大型弾頭の直撃にさえも容易に耐え抜いてみせた。
それだけでなく武器に弾薬を込める必要が無くなった事、さらにビーム粒子自体が非常に軽量である事も合わさり、兵器の大幅軽量化とコストの大幅削減にさえも成功した。
これまでの実弾銃や実体武器を遥かに凌駕する高性能、高威力のビーム兵器・・・それを無力化するIフィールドなどの対抗手段も開発された為、それに対抗する為の実弾武器の需要も決して減っているという訳では無い。
だがそれでも今ではほとんどの国の軍隊が、このビーム兵器を主力兵装として使用しているのが現状だ。それはグランザム帝国軍とて決して例外では無かった。

そのビーム兵器が、突然使えなくなってしまったとしたら・・・果たして兵士たちは正気でいられるのだろうか。
その混乱の隙を突き、予め用意していた実弾武器でグランザム帝国軍を一網打尽にする・・・それが建民の狙いだったのだ。
建民の命令で一斉にマシンガンやロケットランチャーを乱射するチャイナ王国軍。春麗や翠玲たちもミサイルコンテナから大量のミサイルを乱射する。

それとは逆に赤色の粒子に飲み込まれたグランザム帝国軍からは、粒子攪乱によってビーム粒子の活動を阻害され、これまで大量に飛んできた弾幕が全く飛んで来なくなってしまっていた。
これまでのグランザム帝国軍優勢の戦況が一転して、まさにチャイナ王国軍による一方的な蹂躙となってしまっている。
上空にいるカリンだけは粒子攪乱の影響を免れたようだが、それでもグランザム帝国軍の大半は事実上壊滅状態になってしまっていた。
その様子を建民が高笑いしながら、両手を何度も大きく叩きながら見つめていたのだった。

「ふはははははは！！見たかシルフィア！！これが真の戦術という物なのだ！！今頃奴らは突然ビーム兵器が使えなくなった事で慌てふためいているだろうて！！」

大量の粒子攪乱幕に包まれたグランザム帝国軍の様子を、目視でもセンサーでも確認出来ないのは残念だが・・・それでも建民は自らの勝利を信じて疑わなかった。
これで残るは事実上、上空で制空権を掌握しようと孤軍奮闘しているカリン１人と、彼女に随伴している60機近いキラービーグだけだ。

「わざわざ金リンダを人質に取るまでも無かったな。ジィダオ部隊は直ちにラザフォード中尉の迎撃に向かえ！！地上部隊はそのまま実弾武器による弾幕を緩めるな！！奴らを情け容赦なく大量虐殺するのだぁっ！！」

建民の命令でジィダオの飛行ユニットを展開した春麗らフレームアームズ・ガールたちが、一斉に上空のカリンに襲い掛かった。
そんなカリンを援護しようと、キラービーグが一斉に春麗たちにビームマシンガンによる弾幕を浴びせるが、それでも春麗たちはガンシールドで易々と防いでみせる。

「純白のヴァルファーレか！！だが我らジィダオの絶対障壁を崩せるか！？」
「雷春麗大尉・・・！！」
「ラザフォード中尉！！私怨は無いが、貴官のお命頂戴する！！覚悟ぉっ！！」

カリンのベリルソードと春麗のビームランスが何度もぶつかり合う。
そんな春麗を援護しようと、翠玲たちもまた一斉にガンシールドによる弾幕で、キラービーグを次々と破壊していく。

「国の為、民の為、我々はここで引く訳にはいかんのだぁっ！！」

間合いを取ったカリンだったが、春麗のガンシールドからカリンに無数のビームが襲い掛かる。
それをカリンは背中のアーセナルアームズから3本のベリルナイフを分離、合体させた防御兵器のディフェンスローターで巧みに防いでみせた。
春麗の砲撃をイクシオンのリフレクタービットのように空中制御したディフェンスローターで防ぎつつ、カリンはベリルソードとベリルナイフを2本ずつベリルショットライフルと合体させ、大型剣のフォートスマッシャーに変形させて翠玲に斬りかかった。

「このフォートスマッシャーの威力なら！！」
「器用な真似をする！！だが、やらせるかぁっ！！」

春麗の砲撃はディフェンスローターに次々と阻まれて、カリンには届かない。
カリンの斬撃を慌ててガンシールドで受け止める翠玲だったのだが、カリンのフォートスマッ

シャーの超威力によって派手に吹っ飛ばされてしまう。
　あまりの威力に、翠玲のガンシールドに亀裂が走ってしまっていた。

「きゃあああああああああああああああああっ！！」
「総員ラザフォード中尉から距離を取りつつ翠玲を援護しろ！！あの大型剣の直撃をまともに食らえば、ジィダオと言えども危険だ！！」
「「「「「「「「リージェイ！！」」」」」」」」

　ジィダオ部隊の少女たちがカリンを取り囲み、一斉にカリンにガンシールドからの弾幕を浴びせるが、それでもカリンが身に纏うレイファルクスの機動性の前に、ロックオンすらままならない。
　翻弄される少女たちに、さらにカリンは無数のキラービーグからの弾幕を浴びせる。
　このキラービーグの攻撃自体は、ジィダオの防御力の前では全く脅威ではない。だがそれでも少女たちの注意をカリンから削ぐには充分な効果を発揮していた。
　キラービーグを1機撃墜した少女に、一瞬の隙を突いたカリンの斬撃が襲い掛かる。

「ひいっ！？」
「華花（シャンファ）准尉ぃっ！！」

　少女に放たれたカリンの斬撃を、翠玲がガンシールドで再び受け止める。
　再び吹っ飛ばされる翠玲。今の一撃でガンシールドの亀裂がさらに増すが、それでも翠玲は決して引かない。

「こんのおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！」

　吹っ飛ばされながらも翠玲は、ビームハンドガンをカリンに向けて必死に乱射。
　だがカリンはそれを的確に避けながら、フォートスマッシャーで翠玲に追撃を掛けた。

「何で！？何で当たらないのよぉっ！！」
「翠玲！！」

　カリンの斬撃をガンシールドで受け止めた春麗が、そのまま至近距離からカリンにガンシールドからの弾幕を浴びせる。
　慌ててそれを避けて間合いを離すカリン。だが春麗のガンシールドにも亀裂が走ってしまっていた。
　やはりカリンは強い。春麗だけは何とか食らいつけているが、実力も練度も翠玲たちとは桁違いだ。それだけでなくレイファルクスの性能も春麗の想像以上だった。
　ジィダオの性能なら足止め程度なら何とかなるんじゃないかと春麗は思っていたのだが、カリン1人にここまで苦戦させられるとは正直計算外だった。
　先程まで春麗の弾幕を防いでいたディフェンスローターが3本のベリルナイフに分離し、再びカリンの背中の翼に収納される。

「まさに純白のヴァルファーレだな。それを纏うのがアルザード大尉の従妹だというのが、何とも皮肉めいた話だが・・・！！」
『た、隊長！！大変です！！地上部隊がぁっ！！』
「どうした！？何があった！？」

　その死闘の最中、オペレーターの少女から春麗に信じられない内容の通信が届けられた。

『我が軍の地上部隊が、グランザム帝国軍からの実弾武器による砲撃を受けています！！』
「何だとぉっ！？」

慌てて春麗が地上を見下ろすと、赤色の粒子攪乱領域から大量の実弾による弾幕が、一斉にチャイナ王国軍に放たれていた。
予想外の出来事に、春麗も翠玲たちも驚きを隠せない。
建民もまた信じられないといった表情で、モニターに映る戦況を見つめていたのだった。

「ど、ど、ど、ど、ど、どうなっているのだ！？何故奴らが実弾兵器を！？ええい、構わん！！こちらも撃って撃って撃ちまくれぇっ！！」
「しかし先程の一斉掃射によって、我が軍の実弾兵器の残弾数も残り僅かです！！」

あれだけ盛大に撃ちまくったのだ。先に残弾が尽きるとしたらチャイナ王国軍の方だろう。
先に相手に撃たせて残弾を消耗させた所へ、逆にこちらは万全の状態で相手の弾切れを待ってから迎撃する・・・これがシルフィアの狙いだったのだ。
それがまさに功を奏し、シルフィアの狙い通りチャイナ王国軍は追い詰められてしまっている。

「ならばビーム兵器を使え！！まだエネルギー量は充分残っているだろう！？」
「粒子攪乱領域に阻まれ、我が軍のビーム兵器はグランザム帝国軍に届きません！！」

先程までとは一転し、予想外の出来事に慌てふためいてしまった建民。
それとは対照的に春麗は冷静沈着に、シルフィアの戦術を瞬時に理解したのだった。

「まさか我が軍の粒子攪乱を、守りの手段として逆に利用したとでも言うのか！？」

それにしてはグランザム帝国軍の手際があまりにも良過ぎる。戦闘前に建民の作戦が事前にシルフィアに漏れていたとしか考えられなかった。
チャイナ王国と同様に、グランザム帝国側もスパイを送り込んでいたとでもいうのか。だがあれだけ厳重な情報統制や入出国者の管理をしていたというのに、一体どうやって・・・？
だが今はそんな事よりも、この状況をどうにかする事の方が先決だ。

『隊長、殿下からのご命令です！！直ちにラザフォード中尉を撃墜して地上部隊の援護に回れとの事です！！』
「殿下も簡単に言ってくれるな！！だがここは指示に従うしかあるまい！！地上部隊に一時後退して体勢を立て直させるよう、殿下に御進言しろ！！」
『リージェイ！！』

地上部隊の兵士たちが、残弾数が残り僅かになってしまった実弾兵器を粒子攪乱領域に向けて必死に放つのだが、やがて弾切れを起こす兵士たちが何人も現れ始めていた。
元々建民が兵士たちに実弾兵器を所持させていたのは、奇襲目的の為だ。
チャイナ王国軍のほとんどの兵士たちが、作戦に支障が出ない程度の必要最低限の弾数しか武器に込めていなかったのだ。
実弾兵器というのはビーム兵器と違い、弾数をあまりにも多く搭載し過ぎると、それだけ重量が重くなってしまい、兵士たちの動きを逆に阻害する事になってしまうのだ。それ故に建民は今回の作戦を効率よく実行する為に、兵士たちに弾数を必要最低限しか所持させなかったのだが。

『リアナ！！』
「了解！！総員バックワーム解除！！これよりチャイナ王国軍を挟撃する！！」
「「「「「「「「イエス、マム！！」」」」」」」」

その時を待っていたかのように、シルフィアの合図と同時に、いつの間にかチャイナ王国軍の背後に回り込んでいたリアナらゼルフィカール部隊の少女たちが被っていたマントを脱ぎ棄て、実弾兵器の弾切れに陥ってしまったチャイナ王国軍の地上部隊に一斉に襲い掛かった。
弾切れに動揺していた所をいきなり挟撃され、チャイナ王国軍の兵士たちが次々とリアナたちに虐殺されていく。

「な、な、な、な、な、何がどうなっているのだ！？奴らはジィダオ部隊に敗れて撤退したのではなかったのか！？そもそも何故今までレーダーに反応しなかったのだ！？」
「恐らくは何らかのステルス機能を使用し、潜伏していた物だと思われます！！」
「ス、ステルスだとぉっ！？おのれ、小賢しい小娘共がぁっ！！」
「殿下、我が軍の損害率が30％を超えました！！このままでは･･･！！」
「ええい、ジィダオ部隊を地上部隊の援護に回らせろ！！ラザフォード中尉は航空部隊に迎撃させろ！！あれだけの大出力のビーム兵器を何発も撃ちまくっているのだ！！あの新型フレームアームもそろそろエネルギー切れを起こす頃だろう！？奴を数で圧倒せよ！！」
「リージェイ！！」

建民からの命令を受けた春麗たちが、カリンをほったらかして慌てて地上部隊の迎撃に回った。
取り残されたカリンに、チャイナ王国軍の航空部隊からの砲撃が一斉に襲い掛かる。
フォートスマッシャーを分離させたカリンがベリルソードとベリルショットライフルを再びイーグルハント形態へと合体させて、航空部隊を迎撃。
カリンと生き残った40機近いキラービーグによって、次々と戦闘機が撃墜されていった。
そんな中、春麗とリアナが再び激突。ビームランスとビームサーベルが何度もぶつかり合う。
だが翠玲たちはゼルフィカール部隊の少女たちの前に、完全に押されてしまっていた。

「先程までとは動きがまるで違う･･･！！やはり貴官らが私たちに敗れたのは、殿下を油断させる為の演技だったのか！！」
「その通りよ。だけど今更気付いた所でもう遅いわ！！ついでに言っておくけど貴方たちの作戦は最初から把握していたわ！！シルフィア様が建民のパソコンをハッキングしたからね！！」
「やはりそういうカラクリだったのか！！」

そんな機密情報が入ったパソコンを何故ネットに繋ぐのか。そもそもシルフィアがハッキングのスキルを持っている事は建民だって知っていたはずだ。あまりにも軽率だと言わざるを得ない。
この建民のあまりの無能さ、軽率さのせいで、多くの兵たちが戦場で犠牲になったのだ。その事実に春麗は歯軋りしたのだった。

「我々のジィダオも損傷が激しく、それに地上部隊も実弾武器の残弾数も残り僅か･･･最早進退窮まったか･･･！！」

リアナと死闘を繰り広げながら、春麗は冷静に戦況を把握し、建民に通信を送ったのだが。

「殿下！！この戦、最早我が軍に勝ち目はありません！！どうか降伏を！！」
『ふ、ふざけるなぁっ！！何故この私があんな小娘に降伏などせねばならんのだぁっ！？』
「殿下、ご自愛下さいませ！！これ以上は兵たちを無駄死にさせるだけです！！どうか大人しく

シルフィア皇女に降伏を！！」

　カリンとの戦いで損傷した春麗のガンシールドが、リアナのビームマグナムの一撃によって遂に大破してしまった。
　それでも春麗は怯む事無く、ビームランスで必死にリアナと白兵戦を繰り広げる。

「ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラザフォード中尉はどうなっている！？奴さえ始末してしまえば・・・！！」

　そのカリンによって戦闘機部隊は壊滅、さらにベリルショットランチャーにベリルソードとベリルナイフを2本ずつ合体させたフォトンランチャーによる砲撃が、巡洋艦の推進部を破壊。制御を失った巡洋艦が地上へと不時着していく。

「何故だ・・・！？あれだけ大出力のビーム兵器を何発も撃ちまくってるんだぞ！？幾ら何でもそろそろエネルギー切れを起こす頃だろう！？なのに何故あそこまで動ける！？まさか帝国の奴らもマナエネルギーの実用化に成功したとでも言うのか！？」
「巡洋艦9番艦、10番艦、航行不能！！我が軍の航空部隊の損害率が70％を超えました！！ジィダオ部隊もゼルフィカール部隊に完全に抑え込まれています！！さらにグランザム帝国軍の伏兵が地上部隊を挟撃！！完全に取り囲まれています！！」
「ええい、こうなったら切り札を用意してくれるわ！！」

　カリンに巡洋艦からのミサイルが一斉に襲い掛かるが、カリンの背後から一斉にビームマシンガンによる砲撃が浴びせられ、次々とミサイルが撃墜されていった。
　そしてカリンを庇うかのように、パワードスーツを装備した帝国兵20人が立ちはだかる。

「待たせて済まなかったなラザフォード中尉！！シルフィア様のご命令により、これより貴様を援護する！！」
「ジューダス大尉、そちらこそご無事で何よりです。」
「ここは俺たちに任せ、貴様は敵将・建民を討て！！」
「はっ！！」

　味方部隊の援護を受けながら、カリンが全速力で建民のいる旗艦へと飛翔する。
　このまま放っておいてもグランザム帝国軍の勝利は揺るがないだろうが、建民さえ始末してしまえば、主を失ったチャイナ王国軍は降伏するしか無くなるだろう。

「これで終わりにするわよ！！」

　フォトンランチャーを手に、旗艦の指令室に向けて突撃するカリン。
　だが指令室の目の前でフォトンランチャーを構えたカリンが目にした物・・・それは・・・。

「な・・・母さん！？」
『動くなよラザフォード中尉！！貴様の母親がどうなってもいいのかぁっ！？』

　リンダを背中から拘束し、首筋にナイフを突きつける建民の姿だった。

5. 終戦

今にもカリンに殺される寸前の所で、母親を人質に取りカリンを脅す建民・・・その無様で見苦しい光景は世界中の戦場カメラマンを通して、世界中に生中継されてしまっていた。
リンダを人質に取られ、フォトンランチャーを構えたまま身動きが出来ないカリン。
そのリンダはとても不安そうな表情で、久しぶりに再会した娘の姿を見つめていたのだが。

「殿下、何を馬鹿な事を！！こんな真似をすれば重篤な国際問題になるという事が、貴方はご理解なさらないのか！？」
「亡命した民間人を人質に取る・・・あんな最低な統治者の為に命を懸けて戦う事が、貴方の本意なのですか！？雷大尉！！」
「くそっ、殿下もラザフォード中尉に追い詰められた事で、遂に気でも狂われたか・・・！？」

リアナと死闘を繰り広げながら、春麗は建民の愚かな行為を目の当たりにして苦虫を噛み締めたような表情になった。
民間人を人質に取って敵国の兵士を脅す・・・この建民の行為は重篤な国際条約違反なのだ。
仮にこの戦いでチャイナ王国が逆転勝利を収めたとしても、これでは戦争の後に待っているのは世界中からの強い非難だけだ。後々の他国との外交問題にさえ発展する事にもなりかねない。
いや、そこまでしなければならない程までに、シルフィアが建民を限界まで追い詰めてしまったと言うべきか。

シルフィアの一連の戦術によって、チャイナ王国軍の航空部隊はほぼ壊滅、地上部隊も損害率が60％を超えてしまっていた。いや、粒子攪乱を逆に利用された上に実弾兵器も弾切れになってしまった事から、実質壊滅状態だと言ってもいいだろう。
それとは対照的にシルフィアの戦術によって巧みに守られた事で、グランザム帝国軍の損害率はごく僅かだ。
頼みの綱のジィダオ部隊もリアナらゼルフィカール部隊に抑え込まれ、独立遊撃手として航空部隊に多大な損害を与えたカリンが、今まさに建民の首を取る寸前まで追い込んでしまっている。
この一連の状況が、建民をこのような凶行に走らせてしまったのだ。

「ラザフォード中尉！！武器を捨てて両手を上げろ！！少しでもおかしな真似をすればお前の母親を殺すぞ！！」
「カリン！！お願いだから言う通りにして！！もうこれ以上その手を血で染めるのは止めて頂戴！！」
「・・・・・。」

涙まじりにカリンに訴えるリンダを前に、カリンはやけにあっさりとフォトンランチャーを手放し両手を上げたのだった。
ガコンガコンと派手な音を立てながら、フォトンランチャーが旗艦の鋼板の上に転がり落ちる。
そのカリンの無様な姿を目の当たりにした建民が、リンダの首筋にナイフを突き付けたまま、ニヤニヤしながらカリンを見据えていたのだが。

「よーし、そのまま動くなよ！！いいか！？少しでも妙な真似をしたらこの女を殺すからな！？」
「あああ・・・カリン・・・！！」

「さすがの帝国軍最強の女剣士と言えども、身内を人質に取ってしまえはこのザマよ！！隠しても無駄だぞ！？その機体の動力源がマナエネルギーである事は分析済みだ！！いずれコーネリア共和国にも攻め込む予定だったが、その機体を鹵獲してしまえば我々もマナエネルギーの恩恵を・・・！！」

だが言いかけた建民に、カリンが建民だけでなく母親であるリンダにとっても、あまりにも残酷な言葉を告げたのだった。

「貴方、何か勘違いしていないかしら？確かに疑似的な無限稼働を実現してはいるけど、このレイファルクスの動力源はマナエネルギーじゃないわよ。」
「は！？」
「それに彼女は確かに私の母親だけど、それでも今は私の身内では無いわ。だから今ここで貴方に殺されようが、そんなの今更私の知った事じゃない。」
「な、何だとぉっ！？」
「私の家族はシルフィアとシオンだけよ。」

両手を上げながら威風堂々と、あまりにもはっきりと告げるカリンの姿に、建民が思わず頭に血を上らせてしまう。
そしてカリンにはっきりと絶縁宣言をされたリンダもまた、悲しみの表情でカリンを見つめている。
世界中の戦場カメラマンによって、母親を人質に取られたカリンが建民の前で両手を上げる姿が世界中に生中継されているのだが・・・どこからどう見ても追い詰められているのは逆に建民の方だった。
リンダがここで死んでも知った事ではないなど・・・これでは人質の意味がまるで無いではないか。

「き、き、き、き、貴様、本当に分かっているのか！？この女はお前の母親なんだぞ！？」
「そうね。でも貴方も知っているでしょう？私は彼女に捨てられたのよ。」
「そ、そ、そ、そ、それでも貴様の母親なのだぞ！？貴様は人でなしかぁっ！？」
「民間人を人質に取るような貴方に、そんな事を言われる筋合いは無いんだけど？」
「ぐ、ぐぬぬ、ぐぬぬぬぬぬぬ！！」
「どうしたの？彼女を殺すなら早く殺しなさいよ。」

武器を手放し両手を上げながらも、全く動揺せずにはっきりとそう告げたカリンの姿に、遂に限界まで追い詰められてしまった建民が、頭に血を上らせながらナイフを持つ右手に力を込め・・・そして完全にヤケになった建民がリンダを殺そうとした、次の瞬間。

「う、う、う、う、う、うわあああああああああああああああああああああ！！」

建民は頭に血を上らせてしまった事で、完全に失念してしまっていたのだ。
一連の戦闘においてカリンのレイファルクスのアーセナルアームズが、まるでビット兵器のように空中で分離、合体し、様々な形状の武器に変形していたという事を。
それを頭に入れていれば、もう少し冷静に思考を巡らせてさえいれば、シオンがヴァルファーレのフェザーファンネルを制御するのと同じ様に、カリンがアーセナルアームズを脳波でコントロールしているという考えに行きついていたはずなのに。
カリンに挑発されて冷静さを失ってしまい、カリンが手放したフォトンランチャーから完全に目を離してしまった事で、今回の惨劇を招く事になってしまったのだ。

カリンが手放したフォトンランチャーから突然ベリルナイフが分離し・・・指令室の窓を突き破って

一直線に建民へと突撃したのだった。
　それが寸分の狂いも無く、ナイフを手にした建民の右手へと突き刺さる。

「な、ながあっ！？何これぇ！？ひ、ひいっ！？」
「はあああああああああああああああああああああああああああああっ！！」

　その一瞬の隙を突き、フォトンランチャーから分離させたベリルソードを手にしたカリンが窓を突き破り指令室に突撃。問答無用でベリルソードで建民の心臓を貫いたのだった。

「・・・が・・・ま・・・！？」
「あ・・・あああ・・・げ・・・元首様・・・！？嫌ああああああああああああ！！」

　一瞬の出来事だった。指令室のオペレーターたちがカリンに銃を向ける暇さえも無く、心臓を貫かれた建民は即死。そのまま泣き叫ぶリンダを問答無用でお姫様抱っこしたカリンが、指令室から即離脱。
　そして大騒ぎになる指令室を尻目に、カリンが上空でリンダをお姫様抱っこしたまま、回線をオープンチャンネルに設定し、はっきりと宣言したのだった。

「敵将、呂建民、討ち取ったり！！」

　うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！
　カリンの宣言によってグランザム帝国軍は盛り上がり、逆にチャイナ王国軍は意気消沈する。
　そして舌打ちしながら建民の死を見届けた春麗がリアナと死闘を繰り広げながら、翠玲に指示を送った。

「翠玲！！信号弾を撃て！！我が軍はシルフィア皇女に降伏する！！」
「リ、リージェイ！！」

　慌てて上空に信号弾を撃つ翠玲。それを見届けたチャイナ王国軍の兵士たちが次々と降伏し、武器を捨てて両手を上げたのだった。
　翠玲らジィダオ部隊の少女たちも、ゼルフィカール部隊の少女たちにビームマシンガンを突き付けられながら、両手を上げて降伏する。

　かくして建民によって一方的に引き起こされた今回の戦争は、仕掛けられた粒子攪乱を逆に利用するというシルフィアの優れた戦術もあって、グランザム帝国軍の圧勝・・・最高指導者の建民がカリンに討ち取られ戦死した事で、開戦から僅か30分足らずで終戦を迎える事となった。
　勝ちどきを上げる帝国軍の兵士たちの様子が、世界中の戦場カメラマンたちによって全世界に生中継されている。
　そしてカリンもまたリアナたちに温かく迎え入れられながら、リアナたちの前にゆっくりと着地してリンダを降ろしたのだが。

「カリン貴方・・・元首様に対して何て酷い事を！！」

　すっかり怯え切った表情で、リンダがカリンに文句を言い出したのだった。

「何も殺す事は無かったんじゃないの！？元首様と話し合いで解決しようとか、そういう事を少しも考えなかったの！？あの紫色の剣で元首様の心臓を串刺しにするだなんて・・・ああ、貴方は何

て恐ろしい事を！！」

　カリンに対して一方的にまくし立てるリンダを、ゼルフィカール部隊の少女たちもジィダオ部隊の少女たちも、呆気に取られた表情で見つめていたのだが。

「それに貴方、これまでに一体何人の兵隊さんを殺したの！？ルクセリオ公国騎士団の人たちもコーネリア共和国の人たちも、そして今日だってチャイナ王国軍の人たちを沢山！！貴方のせいでどれだけ多くのご遺族の方が悲しまれたと思ってるの！？」

　当のカリンはリンダに背中を向けたまま、ただ黙ってリンダの説教に耳を傾けていた。
　まただ。また。彼女も父親のカシムと全く同じだ。
　新しい男を作って幼少時の自分を捨てて逃げ出した事を、何故全く謝罪しようともしないのか。
　リンダに一方的にまくし立てられながら、カリンは拳を震わせながら歯軋りしていたのだが。
　そんなカリンの心情を察した春麗が、カリンを励ますかのようにカリンの肩をポン、と軽く叩き、カリンを庇うかのようにリンダの前に立ちはだかったのだった。

「リンダ殿。殿下のご命令とはいえ、貴方を拉致軟禁してしまった私がこんな事を言うのも何ですが・・・貴方はラザフォード中尉に対して、他に何か言う事は無いのですか？」

　リアナにビームマグナムを突き付けられながらも、それに全く怯える事無く威風堂々と、突然春麗がリンダに対してそう切り出した。

「貴方がカシム・ラザフォード殿と協議離婚し、我が国の金聖雲（キム・ゼイウン）殿と再婚、幼少時のラザフォード中尉を見捨ててチャイナ王国に亡命した事は、我が国ではとても有名になっている話です。だからこそ殿下は貴方を、ラザフォード中尉を脅す為の人質にしたのでしょうがね。」
「そ、それは・・・。」
「そんな貴方が今真っ先にすべき事は、ラザフォード中尉が殿下を殺した事を責める事ではなく、ラザフォード中尉に対しての心からの謝罪なのではないですか？」
「それは・・・仕方が無いじゃない！！裁判所が私の親権を認めてくれなかったのよ！！だからカリンをカリムさんに預けるしか無かったのよ！！」

　リンダの苦し紛れの、まさに言い訳だとしか思えない言い分に、さすがの春麗も呆れたように溜め息をついたのだった。
　やはりリンダは今のカリンの心情を、今カリンがどれだけ苦しんでいるのかという事を、全く何も分かっていないようだ。
　自分のせいでカリンが今までどれだけ苦しんだのか・・・それを踏まえれば「仕方が無い」などという言葉は、まさに今までずっと苦しんで来たカリンに対する暴言もいい所だろう。
　カリンとは真逆で今まで両親に大切に育てられてきた春麗にとっては、今のカリンの境遇があまりにも哀れで仕方が無かった。

　カシムが勝手に残した借金を返済する為に、カリンが士官学校を辞めてまで風俗店で2年間も自らの身体を売り続けてきた事も、その日暮らしで精一杯でゴミ箱の残飯を漁って飢えを凌いでいた時期もあった事も、先日の民事裁判がきっかけとなって、今では最早世界中で話題になっている事だ。
　それは当然、リンダの耳にも入っているはずだろう。それが果たして仕方が無いで済まされる事なのか。
　自分が新しい夫とのうのうと幸せの日々を過ごしている間に、取り残されたカリンはまさに地獄の

日々を味わい続けてきたというのに。

「・・・リンダ殿・・・貴方という人は・・・やはり何も分かっていらっしゃらないようだ。」

今まで貴方を苦しめてしまって御免なさい・・・その、たったその一言だけが、何故カリンに対して言えないのか。そんな事も言われなければ分からないのかと。
リンダは協議離婚の際に親権がカシムにあると裁判所に告げられたから、仕方無くカリンを見捨てるしか無かったと春麗に言い訳していた。
それは確かに法的には正論であり、仮にカリンがフュリーに相談した場合、リンダの言動は国際法に則れば確かに正論ではあると、そうカリンに告げただろう。

だが、そうではない。そういう事では無いのだ。
カリンがリンダに求めているのは、そういう事では無いだろうに。
さすがの春麗もリンダに対して苛立ちを隠せずにいたのだが・・・そんな春麗をカリンがそっ・・・と手で制したのだった。

「ラザフォード中尉？」
「もういいです、雷大尉。もう私はこの人に何も期待なんかしてませんから。」

もう二度と会う事は無いと思っていたのだが・・・いや、今後もう二度と会うつもりは微塵も無いのだが・・・この際だからカリンはリンダに対して、この場ではっきりと決別宣言をする事にした。
リンダにしっかりと正面から向き合い、とても真剣な表情で、カリンはリンダにまくし立てる。

「最初に言っておくけど、さっき私が建民に対して、母さんが今ここで死のうが知った事では無いと告げたのは、建民を脅す為のブラフでも何でもない。私の本心からの言葉よ。」
「そんな、カリン貴方、一体何を言っているの！？」
「あの時は人道的な立場から母さんを助けたけど、別に母さんがあの場で建民に殺されようが、そんなの私には今更関係無い。」
「殺すとか殺されるとか、どうしてそんな残酷な事を平気で言えるの！？さっきも言ったけど元首様を殺す必要があったの！？元首様と話し合いで解決しようとか・・・」
「あの状況で建民と話し合いが通用するとでも本気で思っていたの！？母さんの頭の中は花畑で埋まってるんじゃないの！？」

カリンに怒鳴り散らされたリンダが、怯えたような表情ですっかり黙り込んでしまう。
建民は本当にどうしようもない愚劣極まりない男だ。いずれマナエネルギーの技術を奪う為に、コーネリア共和国に戦争を仕掛けるつもりだったとまでカリンに断言したのだ。
あの状況で建民を殺さなければ、この先グランザム帝国に・・・いいや、これは最早グランザム帝国だけの問題ではない。世界中の国々が建民の脅威に晒される事にもなりかねなかったのだ。
そうなればこの先、一体どれだけの人々が傷つく事になるのか。一体どれだけの命が失われる事になるのか。

確かにリンダの言う様に話し合いが通用すれば、それに越した事は無かっただろう。だが建民のような愚劣な男を相手に、果たして話し合いなど通じるのだろうか。
それが出来ない状況だったからこそ、建民が横暴な態度を崩さず、理不尽な理由で一方的にグランザム帝国に攻めて来たからこそ、グランザム帝国軍もチャイナ王国軍を迎撃したのだし、こうしてカリンも建民をその手で殺したのだ。
グランザム帝国を、グランザム帝国に住まう多くの人々を、そして何よりも大切な存在であるシル

フィアを、建民の魔の手から守る為に。

「これだけは覚えておいて頂戴。話を聞いた限りだと母さんは相当な平和主義者のようだけど、想いだけでは何も守れはしない。その想いを貫く為の力もまた必要なのよ。このレイファルクスだってそう、私は軍人として国を守る為に力を振るっているのよ。」
「だったらもう軍人なんか辞めて頂戴！！国を守る為に人殺しをするなんて、そんなの・・・」
「辞める訳が無いでしょう！？今の私はシルフィアの騎士（ナイト）なのよ！！それに私たちは人殺しを目的にしてる訳じゃない！！そもそも私を捨てた貴方なんかにどうして今更、そんな事をいちいち指図されないといけないの！？」

この期に及んでカリンに対して軍人を辞めろなどと軽々しく言えてしまうリンダに、リアナも翠玲も・・・いや、この場にいる全員が軽蔑の目を向けたのだった。
春麗も言っていたが、やはりリンダは何も分かってはいないようだった。
カリンが何の為にその力を振るっているのか・・・いや、それ以前にカリンの今の気持ちさえも。
目に涙を浮かべながら拳を震わせるカリンの右手を、春麗がそっ・・・と優しく両手で包み込む。

「ラザフォード中尉。貴官のリンダ殿への怒りと悲しみは、私も痛い程理解している。だが怒りに身を任せてリンダ殿を傷つける事だけは絶対に駄目だぞ？それではただの暴力に過ぎなくなってしまうからな。まあ聡明な貴官なら私に言われずとも理解しているだろうがな。」
「・・・分かっています。訓練兵だった頃、オラトリオ少佐に散々言われてきた事ですから。」
「そうか。ならいい。」

想いだけでは何も守れはしない、想いを貫くための力が必要だとカリンはリンダに先程言ったばかりだが、想いの無い力などただの暴力に過ぎないのだから。
力を持ったその瞬間から、力を持つ者としての責任が生じるのだ。
それを決して見失うなと、春麗はカリンに忠告しているのだ。

「リンダ殿。経緯はどうあれ、貴方は幼少時のラザフォード中尉を見捨てた。そのせいでラザフォード中尉が地獄の日々を味わう羽目になってしまった。どうかそれだけは頭に入れておいて下さいませ。」
「だって・・・そんなの・・・仕方が無いじゃない・・・じゃああの時私は一体どうすれば良かったのよ・・・！？これから私は一体どうすればいいのよ！？」
「それは貴方が今後、一生向き合わなければならない問題です。第三者の私が口出しすべき事ではありません。これから生き残った兵たちを呼んで貴方を自宅まで護送させますので、しばらくお待ち下さいませ。拉致軟禁に関しての謝罪と賠償は、また後日させて頂きますので。」

カリンに怒鳴られ、すっかり座り込んで落ち込んでしまったリンダだったのだが、そこへカリンのレイファルクスにシルフィアからの通信が入ったのだった。
リンダを無視し、カリンはシルフィアからの通信を開く。

『カリン、よくやってくれました。早速で悪いのですが雷大尉に私から直接話したい事があるので、後の処理はリアナたちに任せ、彼女を城の応接室に連れてきて貰えませんか？くれぐれも丁重に扱って下さいね。』
「了解。さあ雷大尉、こちらへどうぞ。」
「ああ。」

今更春麗に敵意が無い事はカリンも分かっているが、それでも万が一という事もある。カリンは春

麗の両手に手錠を掛けたのだった。
　春麗も特に抵抗する様子を見せず、シルフィアの命令で駆け付けた護送車へと乗り込んでいく。
　その様子を翠玲たちが、とても心配そうな表情で見つめている。

「あ、あの、隊長・・・。」
「心配するな。シルフィア皇女なら決して悪いようにはしないだろう。むしろ逆にこれは好機だ。シルフィア皇女に今後の我が国の在り方について相談してみるさ。」

　春麗と一緒に護送車に乗り込むカリンだったのだが、最後にリンダにはっきりと告げたのだった。

「さっき建民にも言ったけど、今の私の家族はシルフィアとシオンだけよ。」
「カリン・・・！！」
「・・・さよなら、母さん。もう二度と会う事は無いわ。」

　カリンと春麗を乗せた護送車が、グランザム帝国の城下町へと走り去って行く。
　その様子を地面に座り込みながら涙交じりに見つめるリンダを、リアナや翠玲たちが神妙な表情で見つめていたのだった。

6. 新生チャイナ王国

「そ、そんな・・・たかが道を通るだけで1万ゴルダ払えだなんて、そんなの横暴過ぎるじゃないか！！」
「ここは既に俺ら青龍隊がシメてる私有地や。だからここを通りたければ俺らに通行料を払うのは当然の事だよなあ？」

　よく晴れた清々しい青空に包まれた、翌日の昼間・・・武器を手にした数人のガラの悪い男たちがトラックを取り囲み、運転手に因縁を付けたのだった。
　トラックの運転手の男性は運転席から問答無用で降ろされ、怯えた表情でまともに抵抗出来ずに銃を突きつけられている。
　その様子を周囲の住民たちは、ただ黙って見ている事しか出来なかった。

　建民が戦死し統治者が不在になっただけでなく、これまでの建民の圧政による住民たちの、溜まりに溜まった不満が一気に爆発した反動もあり、チャイナ王国の城下町の治安は今まさに最悪の状態にあった。
　食料や物資の奪い合いなどで街中で立て続けに暴動が起こり、不法侵入や窃盗、強盗、強姦と言った犯罪も街中で多発発生している始末だ。

　無理も無いだろう。これまでは絶対社会主義を掲げる建民の圧政によって、国中の住民たち全員が厳しい監視体制の下に置かれ、歯向かう者は問答無用で処刑される恐怖政治を敷いていたからこそ、チャイナ王国はこれまで表面上は平和でいられたのだ。
　その建民がいなくなり、これまで自分たちを押さえ込んでいた物が何も無くなってしまえば、どうなるか・・・まさにこうなるのは必然だったと言える。
　これまでならこういう状況なら即座にチャイナ王国軍が駆け付け、問答無用で男たちをその場で射殺していただろうが・・・その軍が今ではまともに機能していない状態なのだ。

「ぐあっはっはっはっは！！ほらほらほらほらほら、俺様がお前らを抱き締めてやるからよお！！」
「嫌あああああああああああ！！助けてえええええええええええええ！！」

即席の柵の中に閉じ込められた沢山の女性たちが、目隠しをした大柄な男に追い掛け回され、怯えた表情で逃げ回ってしまっている。
その様子を周囲のガラの悪い男たちが、ニヤニヤしながら見つめていたのだった。

「あいつも趣味の悪い奴だぜ。ああやって目隠しをして、怯える女を追い掛け回して襲うと興奮するんだってよ。」
「そんな回りくどい事して何が楽しいのかねえ？俺にはとても理解出来ねえや。」
「ま、人にはそれぞれ好みって奴があるんだろうけどさ。」

女性たちが逃げないように柵の入り口で見張ってる数人の男たちが、目隠しをしながら女性たちを追い掛け回す男を、何とも呆れた表情で見つめていたのだが。

「あああ・・・せめて雷大尉がいて下されば、決してこんな事には・・・！！」
「ぶはははははははは！！な～にが雷大尉だ！？あいつなら帝国の捕虜になったって世界中でニュースになってるだろうが！！あんな女、いなくなっちまえばただの小便よ！！ぎゃはははははは・・・っ！？」

高笑いしながらトラックの運転手の男性に銃を突き付けている男の肩に、何者かが背後からポン、と軽く手を乗せる。
んだよ、今楽しんでる最中だってのに・・・そんな不満そうな表情で背後を振り向いた男だったのだが・・・その表情が一転して恐怖に震えてしまい、無様にもお漏らししてしまったのだった。

「・・・は・・・ははは・・・しょ、小便・・・（泣）。」

目隠しをした大柄な男が、興奮しながら逃げ惑う女性たちを必死に追い掛け回す。
何やら女性たちの黄色い歓声や、「ここは私に任せろ」「早く逃げろ」といった言葉が聞こえるが・・・そんな事はお構いなしに、男は遂にがっしりと女性の1人を抱き締めたのだった。

「あーっ、つーかまーえたーっ！！」

そのまま女性を壁に叩き付け、その豊満な胸を大きな両手で揉む男だったのだが・・・。

「・・・あーっ？何だ何だ？この女、随分と固ぇおっぱいだなぁおい。」
「そうか。このジィダオの装甲の強固さを気に入って貰えて何よりだ。」
「えあ？」

自分が壁に叩き付けた女性に目隠しを外された男は・・・視界に映った女性の姿に驚愕してしまったのだった。
チャイナ王国軍の新型フレームアーム・ジィダオを身に纏っている、美しくも凛々しい女性・・・それはまさにグランザム帝国の捕虜となっていたはずの・・・。

「れ、れ、れ、れ、れ、れ、雷春麗・・・！？な、何でここに・・・捕虜になってたんじゃ・・・！？」
「はあああああああああああああああああああああああああああっ！！」

「ごえあっ！？」

　そのまま大外刈りで男を地面に叩き付けて拘束した春麗は、呆れた表情で溜め息をついたのだった。
　シルフィアとの対談を終えて、そのまま身柄を解放されて帰国してみれば、随分と城下町の治安が最悪な状況になってしまっているようだった。
　とはいえこうなる事は、春麗自身も想定の範囲内だったのだが・・・ただ1つだけ、シルフィアに頼まれた事だけは全くの想定外だった。

「全く、私にこの国の女王になれなどと、シルフィア皇女も随分と無茶な事を言ってくれる・・・！！私は平民出身の軍人であって皇族の血筋でも無し、まして政治に関しては全くのど素人なんだぞ！？そもそも夫と両親にどう説明すればいいのだ！？」
「何を言ってるんですか。隊長ならきっとこの国を良き方向へと導いてくれると、私はそう信じています。それにシルフィア皇女殿下もサポートすると仰っていたではありませんか。」
「簡単に言ってくれるなよ翠玲。世の中には適材適所という物があってだなぁ。大体私なんかが女王になってしまったら、殿下が遺された5人の御妃たちがどう思うのか・・・。」

　それこそ王位継承権を巡って、建民の5人の妃たちに恨まれ、内乱でも起こされそうな気がするのだが・・・それでも今は先に片付けなければならない事が山程ある。
　先程までトラックの運転手を脅していた男は、翠玲に情け容赦なくビームハンドガンの銃口を向けられ、怯えた表情でお漏らししてしまっていた。
　他の青龍隊とやらの男たちもジィダオ部隊の少女たちに全く歯が立たずに、あっさりと拘束されてしまっていたのだった。
　当然だろう。正規の軍人である、まして最新鋭のフレームアームを纏っている彼女たちに、多少腕に覚えがあるだけのチンピラ如きが勝てるはずが無いのだ。

「だが、その話は取り敢えず後だ。まずは城下町の治安維持が最優先だ。お前たち！！この国で悪事を働く馬鹿共を全員根こそぎ逮捕するぞ！！いいな！？」
「「「「「「「「「リージェイ！！」」」」」」」」」
「無様に生き恥を晒した我が身なれど、それでも国の為、民の為、及ばずながらも必死に足掻いて見せるさ！！行くぞ！！」

　決意に満ちた表情で上空へと飛翔する春麗に、救助された住民たちが一斉に歓声を送ったのだった。